

エジプト先王朝時代における硬質土器の流通

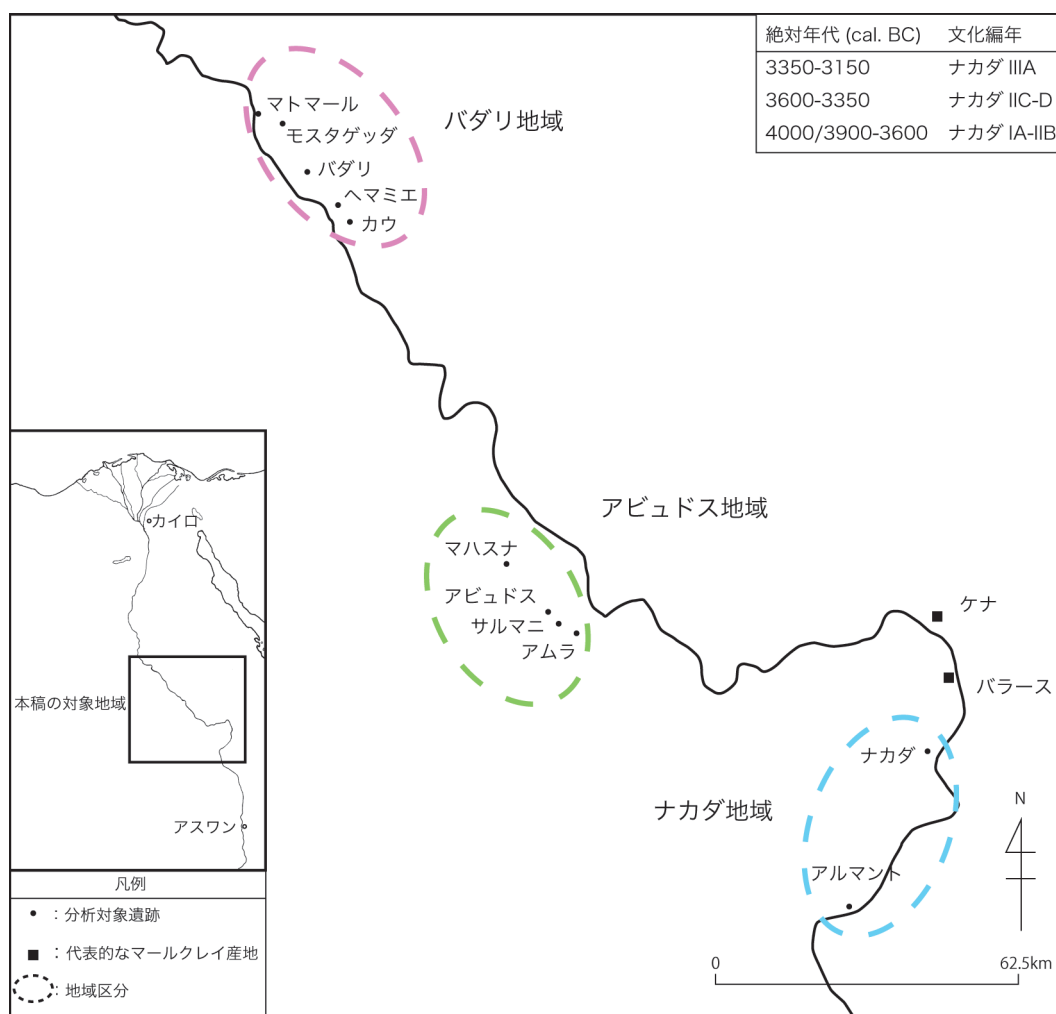
—上エジプト出土の彩文土器と波状把手付土器の再検討—

伊藤 結華

要旨

エジプト先王朝時代の墓に副葬された良質な硬質土器には、彩文土器と波状把手付土器が含まれる。製作技術から当時の社会における硬質土器の革新性が論じられ、各土器の装飾の意味や出土コンテキストからは、社会的役割が考察されてきた。本稿では、既往研究から異なる役割を有していたと推測されるそれぞれの土器について、流通の様相を明らかにすることを目的として、上エジプトの墓地から出土した資料の量的分布と形態分布を分析した。ナカダIID期を画期とする、彩文土器と波状把手付土器の対照的な量的分布から、波状把手付土器の流通拠点がナカダ遺跡からアビュドス遺跡に移ったことを明らかにした。形態分布からは、彩文土器においても、ナカダ遺跡を中心に分布していた土器が大きく減少するという変化が見られた。また、既往研究では説明がなされていなかった波状把手付土器の小型化の背景について、流通に適した器形が求められたことを指摘した。

キーワード：先王朝時代、彩文土器、波状把手付土器、流通



第1図 対象地域

はじめに

先王朝時代（前5000～3000年頃）は古代エジプトの国家形成期にあたり、文化的側面と政治的側面から第1王朝成立に至る動態の復元が目指されている。その基盤となるのが、上エジプト⁽¹⁾南部を発祥とするナカダ文化である。先王朝時代の後半、文化編年のナカダIID期頃までにこの文化がナイルデルタに到達し、地域間の文化的統合が果たされたとされる。その背景については、エリートが権力や支配機構を構築するために、外部地域との交易ルートや専門工人の掌握を通じて、奢侈品などの物品の生産（入手）・流通・消費のコントロールをすることを志向したためであるという解釈が提示されている（e. g. Köeler 2010; Stevenson 2016）。当該期の上エジプトの諸集団は、主にアビュドス、ナカダ、ヒエラコンポリスを中心とする政体へ収斂していく過程にあり（Kemp 1991; Wilkinson 2000）、競争的な集団間の関係が物質文化に影響を及ぼしたものと考えられる。

このような影響を示す器物として挙げられるのが、ナカダIIB期頃に上エジプトで生産され始めたマールクレイ胎土の硬質土器（以後、硬質土器と呼称）である。硬質土器は、ナカダIIC期にはナイルデルタからアスワン以南の下ヌビアにかけて分布しており、上エジプトを起点とする広域流通器物として捉えられてきた。そのため、他地域との長距離交易システムを検討するうえで重要視されたのである（Takamiya 2004）。しかしながら、硬質土器という単位では流通が語られる一方で、硬質土器に分類される彩文土器（Decorated pottery）と波状把手付土器（Wavy-handled pottery）が、それぞれどのような流通の様相を示すのかを主眼においた論考は極めて少ない。

以上を踏まえ、本稿ではまず、ナカダIIB期からIID期の上エジプトにおける彩文土器と波状把手付土器の量的分布と形態分布を分析する。そして、上エジプト内の地域ごとの分布状況から、2つの土器の流通の様相が異なることを明示し、その背景を論じる。

1. 土器分類について

本題に入る前に、本稿で用いる「硬質土器」と既往研究の分類名称の対応関係を確認しておく。

古代エジプトの土器は、ナイル川の沖積土であるナイルシルトから製作された土器と、砂漠由来の石灰質の粘土であるマールクレイから製作された土器に大別される（Nordström and Bourriau 1993: 157）。そして、先王朝時代においても2種類の粘土から、様々な土器が製作さ

れていた。先王朝時代の土器はF. ピートリー（Petrie）によって初めて分類が体系化され、9つのクラスに分けられた（Petrie 1921）。各クラスの分類基準は一貫性を欠いており（第1表）、問題点の議論や修正が行われているものの（Hendrickx 1996; 2006）、今でも各クラス名称はエジプト学の中で周知のものである。

また、これまで述べてきたナイルシルトとマールクレイという分類は、1980年の国際会議をきっかけに確立されたウィーンシステムによるものである（Nordström and Bourriau 1993）。ウィーンシステム確立以降の発掘報告書では、胎土と器形を上位属性とした土器分類を提示しつつ、ピートリのクラス分類が併記されている。ナイルシルトとマールクレイはそれぞれ細分されるものの、おおむね第1表のように対応することが明らかになっている（Hendrickx 2006: Table II. 1. 2.）。本稿の分析で用いる報告書は全てピートリのクラス分類に基づいているため、有機混和材が含まれる粗製土器を除いた波状把手付土器と彩文土器の2クラスを、マールクレイを用いて製作された先王朝時代の硬質土器とみなして議論を進めていく。

第1表 ピートリー のクラス分類

クラス名称	分類基準	胎土
黒頂土器 (Class B)	焼成技術	ナイルシルト
赤色磨研土器 (Class P)	表面調整	ナイルシルト
特殊土器 (Class F)	器種	主にナイルシルト
白色交線文土器 (Class C)	装飾	ナイルシルト
黒色刻文土器 (Class N)	装飾	ナイルシルト
彩色土器 (Class D)	装飾	マールクレイ
波状把手付土器 (Class W)	形態変化	マールクレイ
粗製土器 (Class R)	胎土、表面調整	マールクレイ、有機混和剤
後期土器 (Class L)	胎土、編年	主にマールクレイ

2. 先行研究

2-1. 硬質土器の出現

ナイルシルトが古代エジプトにおける土器生産開始時から使用されていたのに対し、マールクレイを用いた硬質土器の初現はナカダIIB期の彩文土器であった（Friedman 1994: 909）。マールクレイは、石灰岩盤の露呈するエスナ近郊からカイロまでのナイル川流域で採取できることがわかっており（Nordström and Bourriau 1993: 160）、上エジプトで生産が始まったと考えるのが妥当である。具体的な生産地については、製作遺構が発見されていないため、胎土分析の事例増加によって実証的に明らかにされることが期待されている（Friedman 1994: 86-87）。例えばJ. ボリオ（Borriau）らは、ヘマミエ遺跡とアルマント遺跡出土の硬質土器が、同じ粘土

資源を用いて製作されたと解釈できるデータを提示しており (Borriaou et al. 2004)、上エジプトのある特定の地域で生産された土器が流通していた可能性が生じた。硬質土器自体が目的に据えられた分析事例がほとんど無いなかで、馬場はより具体的な硬質土器生産地の解釈を目的とし、時期別の量的分布と胎土分析を合わせた検討を行った。その結果、生産開始当初は、現代でもマルクレイの産出地として知られているケナ・パラス地域 (第1図) の近郊で集約的に生産されており、その後、各地で作られるようになったという見解を示した (馬場 2013a)。

続いて、硬質土器の特徴について述べる。マルクレイの胎土は、ナイルシルトの胎土と比べて明るい色調を呈し、薄くて緻密な器壁に仕上げることができる。これらの性質が、彩色の映える土器 (Wengrow 2006: 92-93)、あるいは貯蔵や運搬に耐える土器 (Buche 2011: 948) を製作するために重要であったと指摘されており、彩文土器は前者、波状把手付土器には後者の機能が該当する。また、2つの土器はほとんど墓地からしか出土しておらず、日用品ではなく主に葬送用として製作された良質な土器 (fine ware) だったと考えられている (Friedman 1994: 911)。さらに、硬質土器の生産開始に伴って窯焼きが導入されたと推定されており (馬場 2013b: 180; 2016)、工芸技術の転換点⁽²⁾として位置づけられる (Hendrickx 2011: 94-95)。

2-2. 彩文土器と波状把手付土器

本節では、彩文土器と波状把手付土器の概略を述べ、分布や流通に関わる先行研究についてまとめる。

(1) 彩文土器

彩文土器は、赤色顔料で文様を施して焼き上げた土器である。文様の内容については近年G. グラフ (Graff) によって詳細な集成、分類が行われた (Graff 2009)。文様は幾何学文と形象文に大別でき、幾何学文には渦巻文、波状文、斑文、山形文、鱗状文等が含まれる。形象文は概ね、船、動植物、人物等が解釈されている。器種は、管状の把手を有する卵形壺と扁球形壺が主である。これらは石製容器と共通しており、また、頻繁に描かれる渦巻文等の幾何学文が石材の模様を模倣したものであると推定されることから、石製容器に影響を受けて成立した系統の器種であると考えられる (Payne 1993: 101)。また、ナカダIIA期ごろまで流通していた白色交線文土器と比較して、鉢などの開口器種が殆ど見られないことから、器壁が形象文を示す媒体となることが重要になっていったと推測されている (Wengrow 2006: 92-93)。

彩文土器の分布や流通については、J. アクサミット (Aksamit) が船の文様が施された土器を観察し、アビュドスからナカダにかけて位置するいくつかの工房で製作されたとする説を提示したほかは (Aksamit 1992)、文様や器種の画一性を記述レベルで指摘したものに留まる。その中で、彩文土器の生産と流通に焦点を当てた研究を行ったのが、J. コックス (Cox) である (Cox 2015; 2020)。コックスは、ナカダII期からIII期までの彩文土器を網羅的に扱い、文様と器種を整理したうえで分布状況を分析し、生産の中心地を抽出することを試みた。その結果、ナカダII期には、幾何文が施された土器が上エジプト内の各地域で生産されていた可能性が高いこと、一方、形象文の土器は主にアビュドス地域で生産され、船の文様が施された土器は特にナカダ遺跡で生産された可能性が高いことを指摘している (Cox 2020)。氏によって、初めて彩文土器の分布状況が定量的に把握されたことは重要である。

(2) 波状把手付土器

波状把手付土器は、肩部または胴部に水平に付けられた波状の把手が特徴である。器種は閉口壺に限られる。把手の痕跡器官化と器形の円筒形化という明瞭な形態変化が看取されるため、ピートリー以来 (Petrie 1901)、見直しがなされながらもナカダ文化の編年の軸となっている (Hendrickx 2006: Table II. 1. 5.)。ピートリーが初期段階に当たるとした器形は、胎土分析により南レヴァント産であったことが判明しており (Payne 1993: 97-98, 130-133)、類似する器形の土器が南レヴァントを中心に確認されていることから (Amiran 1969)、波状把手付土器は搬入土器を模倣して製作が開始されたと考えられる。プロトタイプの土器は、上エジプトではナカダIIC期より出土するようになるが (Hendrickx and Bavay 2002: 67-69)、オイルやワインを納めて搬入された容器だったと考えられている (Ben-Tor 1992: 84)。ナカダIIC期のうちに上エジプトで生産が開始された波状把手付土器にも、液体物が納められていたことが推測される。実際に液体が入れられていたことを示す残滓の例は少ないが、パーム油が入れられていたという報告がある (Petrie and Quibell 1896:15)。

波状把手付土器は、ピートリーのナカダ遺跡の報告以来 (Petrie 1896)、上エジプト南部では墓壇面積の広い墓に集中して出土する傾向が指摘されている (e. g. Bard 1994: 103-104)。高宮は、波状把手付土器を先王朝時代のステイタスシンボルの一つとして捉え (Takamiya 2003)、希少な外来品の模倣品として、生産・流通にはエリートによる制御が働いていたことを示唆している (高宮 2006: 202-205)。また、副葬土器の地域性を検

討したC. ケーラー (Köhler) は、ナカダIIC期土器の分布を全クラス対象に分析し、波状把手付土器の特定の器形がマトマール遺跡からヒエラコンポリス遺跡まで分布していることを明らかにした (Köhler 2014: 160-161)。

2-3. 先行研究の問題点と本稿の目的

本節では先行研究の問題点を挙げ、それを踏まえた本稿の目的を提示する。上述の通り、彩文土器と波状把手付土器は、土器製作技術の研究によって「硬質土器」という枠組みが与えられ、出現時における革新性が明らかにされてきた。また、彩文土器は形象文の象徴性、波状把手付土器は墓地における偏在傾向や墓壇面積に基づく階層的保有状況、あるいは模倣土器としての側面から社会的役割が検討されてきたのである。しかし、それらは副葬、すなわち消費の段階における議論に終始しているという問題点が挙げられる。つまり、各地の集団が競合関係にあったとされる上エジプトでなぜ硬質土器生産が開始されたのか、という問題意識が欠落しているのである。彩文土器と波状把手付土器が既往研究で指摘されてきたような社会的役割を有しているのならば、流通の様相としてどのような差異が現れるのか明らかにする必要がある。

そこで本稿では、まずナカダIIB期からIID期の上エジプト内の各遺跡における彩文土器と波状把手付土器の、量的分布と形態分布を時期ごとに分析して分布状況を提示する。そして、各遺跡でそれぞれどのような土器が供給されていたのか検討し、流通システムの一端を示したい。

3. 対象遺跡・資料と分析方法

本稿で対象とする遺跡は、マトマール遺跡 (Brunton 1948)、モスタゲッダ遺跡 (Brunton 1937)、バダリ遺跡 (Brunton & Caton-Thompson 1928)、ヘマミエ遺跡 (Brunton & Caton-Thompson 1928)、カウ遺跡

(Brunton & Caton-Thompson 1928)、マハスナ遺跡 (Ayrton & Loat 1911)、アビュドス遺跡 (Naville, Peet, Hall & Haddon 1914; Peet 1914; Frankfort 1930)、サルマニ遺跡 (Sayed 1979)、アムラ遺跡 (Randall-McIver & Mace 1902)、ナカダ遺跡 (Petrie & Quibell 1896; Baumgartel 1970)、アルマント遺跡 (Mond & Myers 1937) である (第1図)。地域区分は第1図に示したとおり、バダリ地域、アビュドス地域、ナカダ地域の3つに分ける。

対象とする遺物は彩文土器と波状把手付土器である。先に示した各遺跡の報告書と、ヘンドリックスの集成 (Hendrickx 1989) からデータを抽出し、ナカダIIB期からIID期に比定される墓から出土した土器を分析の対象とする (第1表)。各墓出土の土器の情報としては、ほとんどの場合、ピートリーの分類番号のみが報告書に記載されているという状況である。よって、分析に先立って、ピートリーの分類を解体して過度な細分⁽³⁾を統合した形態分類を行う。遺跡ごとに構成墓数ないし報告墓数に偏りがあるため、1) 出土点数だけではなく副葬土器組成中の割合を算出して、遺跡間の相対的な数量比較を行う。次に、2) 各遺跡における形態と地域ごとの傾向を分析し、これらの結果をふまえて、時期的変遷をまとめる。

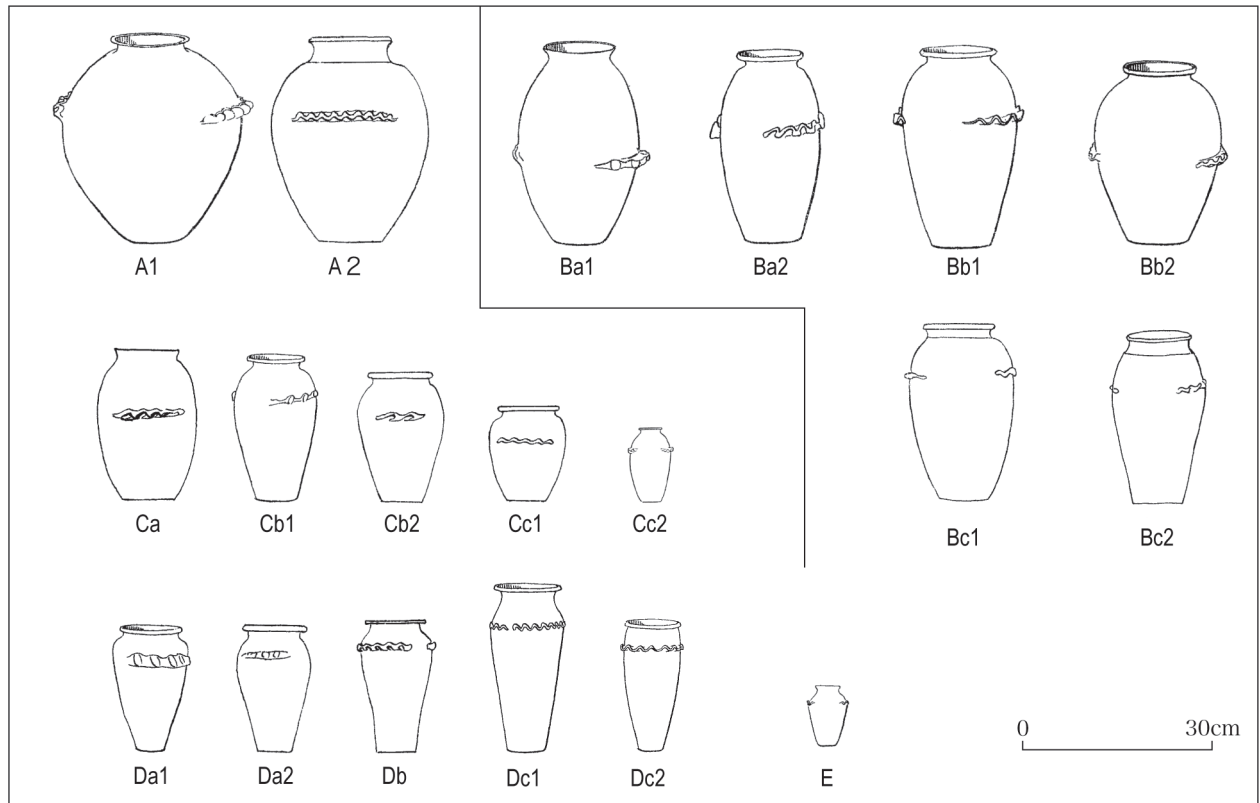
彩文土器について、ピートリーは一部特殊な器種を彩文土器に分類しているが、数が限られているため対象外とし、把手の有無を上位属性として7器種に分類した (第3図)。波状把手付土器に彩文が施されているものを、彩文土器としてカウントしたことを断っておく。文様は幾何学文、形象文、船形文、無文に大別し、以後、器種を数字、文様を括弧付で表現する。例えば、幾何学文が施された有頸壺であれば「4 (幾何学文)」となる。幾何学文は、渦巻状文、波状文、鱗状文、斑状文、山形文、水玉文、格子状文を指す (第4図)。本稿では文様の象徴的意味には踏み込まないが、形象文の中でも37点出土しており、かつ、ナカダ遺跡における集約的

第2表 分析対象墓

遺跡名		マトマール			モスタゲッダ		バダリ		ヘマミエ		カウ			
墓地名		2600-2700墓地	3000-3100墓地	5100墓地	200墓地	600-1800/11700墓地	3600-3900墓地	4600墓地	1500-2000/3100-3300	000/100墓地	200墓地			
推定墓地使用期間		IC-IIC	IB-IIID2	IIA-IIIA1	IIC-IIID2	IB-IIIA1	IC-IIIA2	IIC-IIID2	IC-IIIA1	IC-IIID2	IIC-IIIA2			
墓数	IIB	65			8		7		2		6			
	IIC	40			41		38		11		9			
	IID	17			40		38		8		10			
	計	180			95		95		26		30			
		マハスナ	アビュドス				サルマニ	アムラ		ナカダ		アルマント		
		H墓地	X墓地	U墓地	E墓地	1600-1700墓地	S墓地	A墓地	B墓地	大墓地	T墓地	B墓地	1300墓地	1400-1500墓地
		IB-IIIA2	IID1-IIIB	IA-IIA	IB-IIIA2	IIC-IIID2	IIA-IIID2	IB-ID1	IA-IIIB	IA-IIIB	IIC-IIIB	IC-IIIA2	IIC-IIIA2	IC-IIIA1
		8	2				22	18		90		27		
		12	4				39	23		148		42		
		16	33				37	25		117		34		
		65	53				100	93		502		157		

な生産が想定されている船の文様だけは個別に抽出し（第5図）、分布傾向を分析する。また、管状把手付扁球形壺にのみ存在する無文の個体については、この器

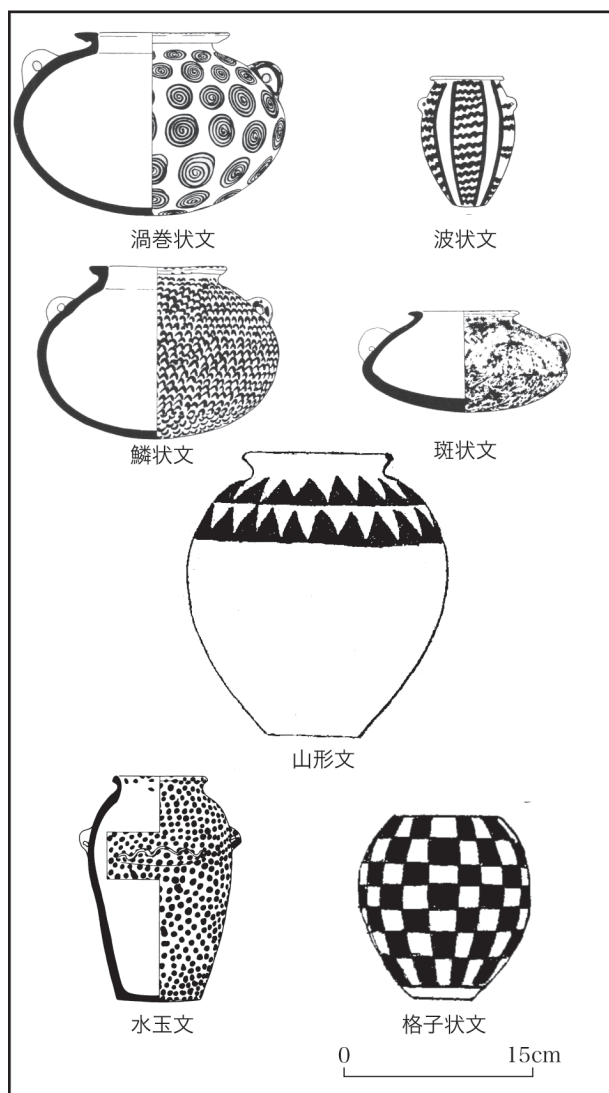
種が石製容器の模倣によって成立した系統であることから、あえて彩色を施さなかった可能性を考慮して分析対象に含めることにした。



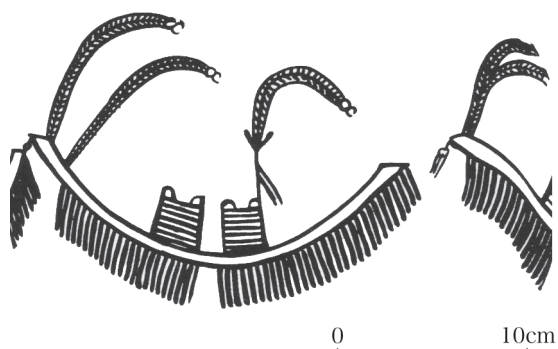
第2図 波状把手付土器の分類



第3図 彩文土器の分類



第4図 幾何学文の分類



第5図 船形文様

〈波状把手付土器の形態分類〉（第2図）

A類:球形壺

A1:胴部が大きく張り出すもの。

A2:肩部に稜をもつもの。

B類:長胴壺

Ba1:胴部がやや張り出すもの。

Ba2:折り返し口縁を有するもの。

Bb1:肩部が張り出すもの。

Bb2:肩部が大きく張り出すもの。

Bc1:肩部がやや張り出し、稜をもつもの。

Bc2:1 と比べて、底部に向かって窄まるもの。

C類:中胴壺

Ca:胴部がやや張り出すもの。

Cb1:肩部がやや張り出すもの。

Cb2: 1 より把手が短いもの。

Cc1:胴部が短く、肩部が張り出すもの。

Cc2:小型で、胴部がやや張り出すもの。

D類:半円筒形壺

Da1:肩部が屈曲するもの。

Da2:肩部が張り、丸みを帯びているもの。

Db:肩部が張り、底部に向かって窄まるもの。

Dc1:頸部が長いもの。

Dc2:頸部と肩部の境が消失したもの。

E類:ミニチュア壺

4. 分析結果

4-1. 量的分布

結果を示すグラフは、南に位置する遺跡から配列している。以下、時期ごとの結果を彩文土器から述べる。

〈彩文土器〉

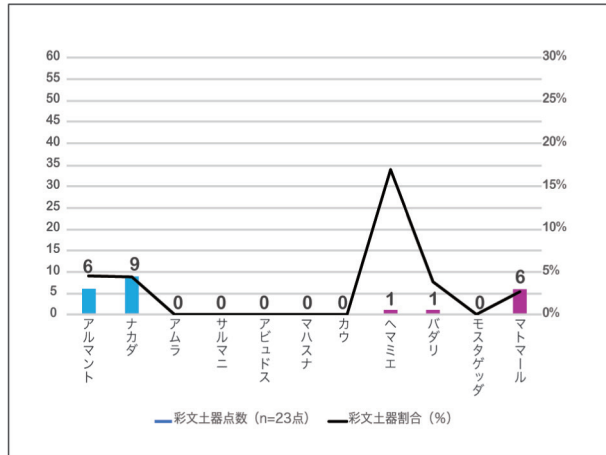
彩文土器は先述の通り初現がナカダIIC期以前と考えられているので、IIB期から分析対象とした。

・ナカダII B期（第6図）

5 遺跡から出土しており、ナカダ地域の15基、バダリ地域の8基から合計で23点である。

ナカダ地域は、アルマント遺跡で6点、ナカダ遺跡で9点出土しており、分布の中心であると言えよう。アビュドス地域から当該期の資料と判断されるものではなく、バダリ地域もマトマール遺跡の6点を除けば、1点のみと少数である。出土墓1基あたりの数は、全遺跡で1点ずつである。

割合で見ると、ヘマミエ遺跡が17%と突出しているように見えるが、これは墓を2基しか取り上げていないことが原因と考えられる。他の遺跡をみると、ナカダ地域は4.5%前後で並び、バダリ地域はバダリ遺跡が3.8%、マトマール遺跡が2.7%と大きな差は生じていない。

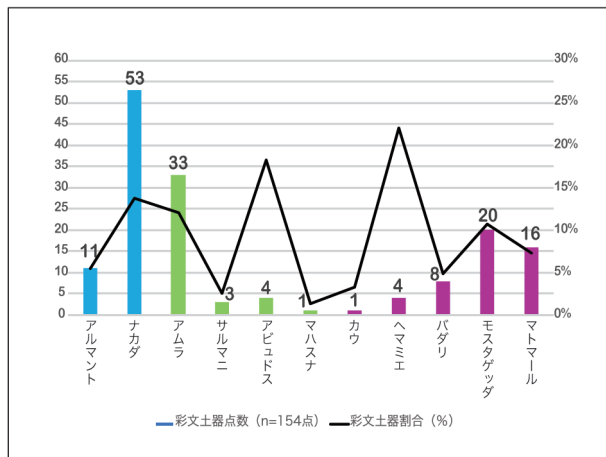


第6図 ナカダ IIB 期の彩文土器

・ナカダ IIC 期 (第7図)

11遺跡から出土しており、ナカダ地域の56基、アビュドス地域の24基、バダリ地域の46基から合計で154点である。出土点数はナカダ遺跡で53点と全体の約3分の1を占めている。次いで、アムラ遺跡で33点出土しており、2遺跡だけで全体の半数以上となる。また、アムラ遺跡以外で目立った増加がないアビュドス地域に対し、バダリ地域では、モスタゲッダで20点、マトマール遺跡で16点、バダリ遺跡で8点が出土している。出土墓1基あたりの点数は、アムラ遺跡（約1.9点）以外では約1～1.3個と横並びである。

割合では、アビュドス遺跡とヘマミエ遺跡が突出しているように見える。アビュドス遺跡は4基中3基、ヘマミエ遺跡は8基中4基で彩文土器が確認されているため、墓数の少なさが要因とは言いきれない。この2遺跡を除けば、出土量の多寡と割合の高低は相関していることが認められる。

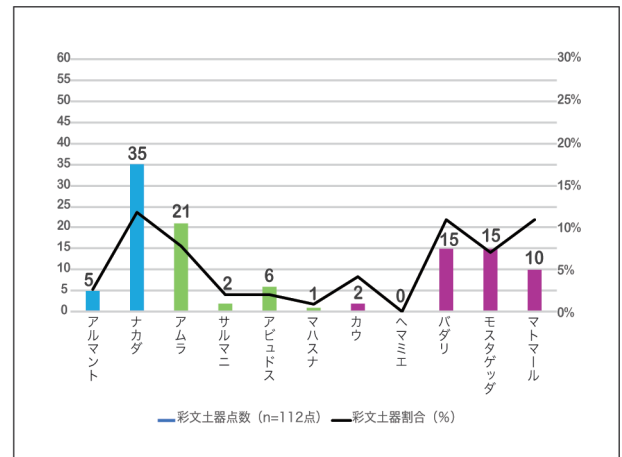


第7図 ナカダ IIC 期の彩文土器

・ナカダ IID 期 (第8図)

10遺跡から出土しており、ナカダ地域の33基、アビュドス地域の21基、バダリ地域の36基から合計で112点である。出土点数は、引き続きナカダ遺跡が最多で35点、次いでアムラ遺跡が21点となっているが、この2遺跡の出土点数が大きく減少したことで、遺跡間の差が小さくなったように見えている。出土墓1基あたりの点数は、アムラ遺跡1.75点、マトマール遺跡約1.4点、ナカダ遺跡1.25点、バダリ遺跡約1.2点となっている。よって、IIC期と比較すると遺跡間の差が小さくなっていると言える。

割合は、前時期までのような遺跡間での乱高下は見られなくなり、概ね出土数との相関があると言える。サルマニ遺跡からヘマミエ遺跡までが一様に低い割合であるとは注目すべきである。



第8図 ナカダ IID 期の彩文土器

ここまでの結果から、以下の4点が指摘できる。

- ①ナカダ遺跡とアムラ遺跡が分布の中心であり続けた。
- ②アムラ遺跡を除いて、複数を副葬する傾向は弱い。アムラ遺跡においても、IIC-D期にかけてその傾向が弱まっていく。
- ③出土量と割合に相関関係が認められる。
- ④IIB-IID期を通じて、サルマニ遺跡からカウ遺跡における出土点数が少ない。

続いて、波状把手付土器の分析結果を述べていく。

〈波状把手付土器〉

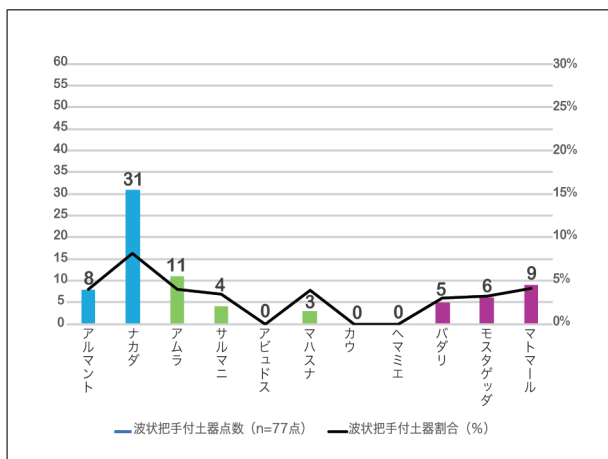
・ナカダ IIC 期

8遺跡から出土しており、ナカダ地域の27基、アビュドス地域の12基、バダリ地域の19基から合計で77点である。出土点数はナカダ遺跡で31点と最も多く、アムラ遺跡が11点とアビュドス地域の中では突出している。サルマニ遺跡では4点、マハスナ遺跡では3点であった。

アルマント遺跡とバダリ地域の諸遺跡では5点から9点と、概ね並んでいる。なお、墓数が少ないアビュドス遺跡、カウ遺跡、ヘマミエ遺跡から当該期の資料と判断されるものはなかった。

出土墓1基あたりの点数は、多い遺跡から順に、アムラ遺跡（2.2点）、ナカダ遺跡（約1.5点）、アルマント遺跡（約1.3点）である。サルマニ遺跡と、バダリ遺跡（1.25点）を除くバダリ地域の遺跡は1点ずつだった。

割合では、ナカダ遺跡が8.1%と最も高かった。他の8遺跡では、出土点数や墓数にかかわらず3%から4.1%の間に収まっており、相対的には一様な分布状況であると判断できる。



第9図 ナカダIIC期の波状把手付土器

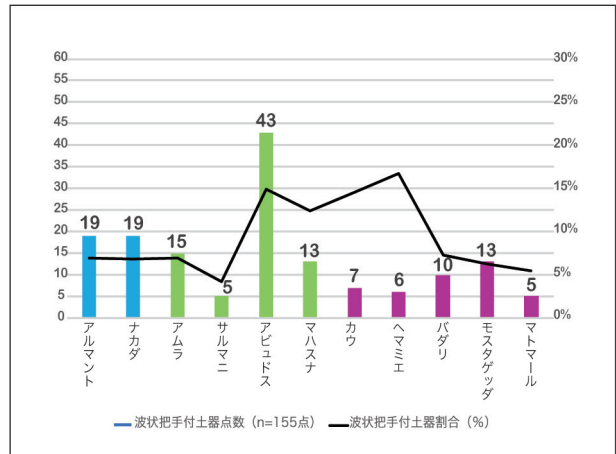
・ナカダIID期（第10図）

11遺跡から出土しており、ナカダ地域の29基、アビュドス地域の34基、バダリ地域の36基から合計で155点である。出土点数はアビュドス遺跡で43点と最も多い。前時期と比べて墓数が増えていることを考慮しても、大規模墓地を抱えるナカダ遺跡を超えて最多であることは、特筆すべき点である。ナカダ遺跡は19点で、アルマント遺跡と同数であった。アビュドス地域では、アムラ遺跡で15点、マハスナ遺跡で13点だが、サルマニ遺跡の5点は墓数と比しても少ない。バダリ地域では出土遺跡数が増加し、出土点数は増加傾向にある。

出土墓1基あたりの点数は、マハスナ遺跡（2.6点）とアビュドス遺跡（約2.3点）が特に多く、カウ遺跡（1.75点）、アルマント遺跡（約1.5点）、アムラ遺跡（約1.4点）と続く。ナカダ遺跡（約1.2点）は大きく数を減らしたわけではないが、アビュドス地域の遺跡との差が開き、バダリ地域の遺跡との差は小さくなった。

割合は、アビュドス地域のアビュドス遺跡とマハスナ遺跡、バダリ地域のヘマミエ遺跡とカウ遺跡で高まりが

認められる。サルマニ遺跡は4.2%、マトマル遺跡は5.5%と、出土点数同様に値がやや下がるが、その他の遺跡では7%前後と一様である。



第10図 ナカダIID期の波状把手付土器

ここまでの結果から、以下の3点が指摘できる。

- ①IIC期からIID期にかけて、波状把手付土器の出土点数が増加し、出土墓数が拡大した。
- ②アビュドス地域において複数点副葬される傾向が強まった。
- ③ナカダ遺跡の優位性が消失し、アビュドス遺跡が分布の主体となった。

4-2. 形態分布

結果を示す表は、南に位置する遺跡から配列している。

〈彩文土器（第3表）〉

・ナカダIIB期

器形は管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺の2種類のみである。これらは石製品と共通する器形である。形象文が施された土器は確認されていない。幾何学文の内訳は、渦巻状文8点、波状文4点、斑状文3点、鱗状文1点、格子状文1点である。管状把手付扁球形壺（6無文）も2点出土している。

・ナカダIIC期

6器種が確認されている。その中で、船形文が施されている土器は、ナカダ地域から18点、アビュドス地域から9点、バダリ地域から4点出土している。アビュドス地域の彩文土器点数はバダリ地域よりも少ないことを考慮すると、ナカダ地域から離れるほど、船形文の土器が減少していることが読み取れる。遺跡ごとに彩文土器の総出土点数をみると、ナカダ遺跡から18点、アムラ遺跡から7点となっており、この2遺跡が分布の中心で

あると言える。

また、各遺跡で最も出土点数が多いのが管状把手付扁球形壺（6 幾何学）である。続いて、ナカダ遺跡以外の遺跡では、管状把手付卵形壺（5 幾何学）の出土点数が多い。これらは、IIB期からの傾向を引き継いでいる。新たに登場した器種は、波状把手付壺、穿孔突起付壺、有頸壺、双卵形壺の4種類だが、どれもナカダ遺跡とアムラ遺跡からは出土している一方で、バダリ地域の遺跡からは1点出土するかどうかという頻度である。管状把手付扁球形壺（6 無文）はバダリ地域でしか見られなかった。

幾何学文の割合は第11図の通りである。渦巻状文、波状文、斑状文、鱗状文の順になることは前時期から変わらず、山形文が増加した。特に点数が多い渦巻状文は、管状把手付扁球形壺が32点、管状把手付卵形壺が9点である。また、波状文は管状把手付扁球形壺が14点、管状把手付卵形壺が19点で、波状把手付壺と有頸壺にも含ま

れる。

・ナカダIID期

7器種が確認されている。船形文が施された土器は2点のみとなっている。特に、管状把手付卵形壺（5 船）が減少しており、23点から0点になったことは特筆すべきである。形象文の土器は3点から12点に増加しているが、ナカダ地域で5点、アビュドス地域で5点、バダリ地域で2点と、相対的にアビュドス地域では形象文が多いと言える。

前時期に引き続き、管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺の出土点数が全体の半数以上を占め、マハスナ遺跡を除く9遺跡で出土している。また、管状把手付扁球形壺（6 無文）がナカダ地域とアビュドス地域でもみられるようになり、3番目に広い分布を示している。

幾何学文の内訳は、波状文、渦巻状文、山形文、斑状文、鱗状文の順になり、水玉文、格子状文が増加した（第11図）。渦巻状文は管状把手付扁球形壺が21点、

第3表 彩文土器の内訳

IIB	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
5 (幾何学)	2	5							1		1
6 (無文)		1									1
6 (幾何学)	4	2					1				1
合計	6	8					1		1		3

IIC	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
1 (幾何学)		2					1				
1 (船)			1								
3 (船)		3									1
3 (形象)											
4 (幾何学)		2								1	
4 (船)		1	2								
5 (幾何学)	4	7	7	2	2				1	4	2
5 (船)		14	4		1				2	1	1
5 (形象)	1										
6 (無文)									1	4	2
6 (幾何学)	5	16	16	1			2	1	3	10	9
6 (船)			1								
7 (幾何学)		1	1								
7 (形象)		1									
合計	10	47	32	3	3		3	1	7	20	15

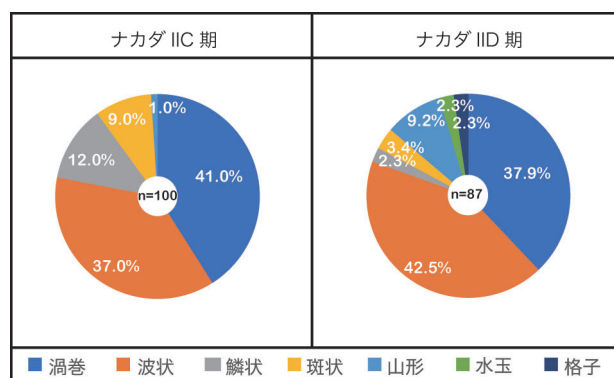
IID	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
1 (幾何学)		3	1			1					
2 (幾何学)										1	
2 (船)			1								
2 (形象)		2									
3 (幾何学)		1							1	3	
3 (船)	1										
3 (形象)		1	2							1	
4 (幾何学)		1									1
4 (形象)			1		1						
5 (幾何学)	1	12	1	1	3			1	7	8	3
5 (船)		2	1						1		
6 (無文)	1	2	2						2	1	
6 (幾何学)	2	8	11	1	2			1	3	1	5
7 (幾何学)		2	1								
合計	5	34	21	2	6	1		2	14	15	9

凡例: 1～4点 5～10点 11～点

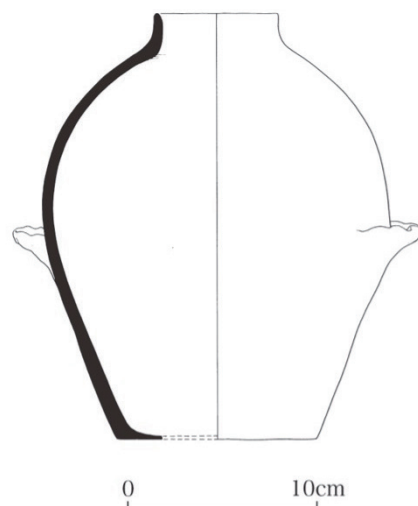
管状把手付卵形壺が10点、双卵形壺で2点である。波状文は管状把手付扁球形壺が8点、管状把手付卵形壺が24点、波状把手付壺と有頸壺にも含まれる。これら2つの文様の傾向は、前時期の傾向を引き継いでいる。点数が増えた山形文の器形内訳を見ると、穿孔突起付壺で5点、有頸壺で1点、管状把手付卵形壺で2点となっている。

ここまでの結果から、以下の3点が指摘できる。

- ①生産黎明期のIIB期からIID期に至るまで、管状把手付卵形壺（5幾何学）と管状把手付扁球形壺（6幾何学）が分布の主体だった。
- ②幾何学文は、渦巻文と波状文様が主体であり、それぞれ管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺との相関が認められる。この傾向に地域間の差異は見られない。
- ③船形文はナカダIIC期を特徴づけ、管状把手付卵形壺との相関が確認された。また、ナカダ地域から離れるほど点数が減少していく傾向が看取された。



第 11 図 幾何学文の内訳



第 12 図 ナカダ遺跡出土の南レヴァント産土器

〈波状把手付土器（第4表）〉

・ナカダIIC期

11の器形が確認されており、出土した全ての遺跡でBb1類が主体となっている。他の器形は1点か2点ずつしか出土していないものの、A1類は3地域共通で出土している。波状把手付土器は南レヴァント産の土器の模倣が起源だが、第12図のようなプロトタイプに似るA1類ではなく、よりスリムなBb1類がこの時期から主体であるという結果は、ヘンドリックスが提示したデータ⁽⁴⁾からも支持される（Hendrickx 1996）。

・ナカダIID期

器形は17種類に増加する。Cb1類がアビュドス遺跡から集中的に出土しており、また、ナカダ地域におけるバリエーションの主体にもなっていると言える。IIC期に主体だったBb1類は、ナカダ遺跡で2点が確認されたのみである。アムラ遺跡ではIIC期にも出土しているBa1類

が主体で、バリエーションはナカダ地域の構成におさまっている。アムラ遺跡は、他のアビュドス地域の遺跡よりも、ナカダ遺跡との相関があると言える。マハスナ遺跡ではCb2類が主体であり、Cb2類は、マハスナ遺跡とバダリ地域に分布が展開している。さらに、アビュドス地域とバダリ地域で共通してCa類とDa1類が出土しており、ナカダ地域の影響ではない2地域間の相関が生まれていると言える。

ここまでの結果から、以下の2点が指摘できる。

- ①生産が開始されたIIC期では、Bb1類が地域を横断して分布の主体であった。
- ②IID期になると器形のバリエーションが増加するが、アビュドス地域を中心にBb1類に似た小型のCb1類の出土点数が多くなる。

4-3. まとめ

これまでの分析結果をもとに、彩文土器と波状把手付土器の時期ごとの分布状況についてまとめる。そして、生産と流通についても考察していく。

〈彩文土器〉

・ナカダIIB期

彩文土器の生産黎明期に位置づけられるが、出土点数が少ないながらもナカダ地域とバダリ地域から出土しており、広い分布を示している。ナカダ地域がバダリ地域で出土する器種を包摂しており、文様のバリエーションが多様であることから、ナカダ地域で生産された土器がバダリ地域で流通していた可能性がある。

第4表 波状把手付土器の内訳

IIC	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カワ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
A1		1	2								1
A2						1			1		
Ba1		2									
Ba2			1								
Bb1	6	28	8	3		2			3	5	7
Bb2											1
Bc1										1	
Bc2	1										
Ca									1		
Cb1	1			1							
合計	8	31	11	4		3			5	6	9

IID	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カワ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
Ba1											1
Ba2		1	7						1		2
Bb1		2									
Bb2			1								
Bc1	5	1								3	
Bc2		2								1	
Ca						4		1	1		
Cb1	7	4	3	1	30		1	3	3	4	
Cb2	1	1				8	3	2	3	1	1
Cc1	3	2	2		1					1	
Cc2							1		2		
Da1				1	5					1	
Da2	2			2	2	1	1			2	1
Db		2			1						
Dc1				1							
Dc2		1			2						
E (ミニチュア土器)	1	3		1	2						
合計	19	19	15	6	43	13	7	6	10	13	5

凡例: 1～4点 5～10点 11～点

・ナカダIIC期

3地域で出土点数の増加が見られるが、特にナカダ遺跡とアムラ遺跡で顕著である。この時期から新たに波状把手付壺、穿孔突起付壺、有頸壺、双卵形壺が出土するようになるが、ナカダ遺跡からは全種類、アムラ遺跡からは穿孔突起付壺を除く3種類が出土している。一方で、他の遺跡では新たに登場した器種は1種類出土するかどうか留まる。

IIB期から引き続き管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺が主たる器種であるが、前者には幾何学文よりも船形文が多く描かれるようになる。船形文の管状把手付卵形壺（5船）はナカダ遺跡が最多の出土点数を示し、ナカダ遺跡から離れる遺跡ほど点数が減少していく分布状況であると言える。本稿ではアムラ遺跡の1点しか確認されなかった船形文の波状把手付壺（1船）について、同様の土器の観察、比較を行ったアクサミットは、いくつかの工房で製作されていたとする説を提示している（Aksamit 1992）。ただし、本分析の結果からは、IIC期にアビュドス地域からバダリ地域、あるいはナカダ地域に彩文土器が供給されたと解釈できるような傾向は読み取れない。これらのことを加味すると、出土点数に對

して割合が大きくなっていたアビュドス遺跡の結果は、彩文土器がアビュドス地域内で生産・消費された可能性を示唆していると言える。

また、この時期はバダリ地域でのみ無文の管状把手付扁球形壺（6無文）が出土している。IIB期にはナカダ遺跡からも出土しており、続くIID期ではアルマント遺跡、アムラ遺跡からも出土するようになるので、さしあたって、ナカダ地域から流通した種類であると考えられる。

・ナカダIID期

総出土点数が154点から112点になっているが、検出墓数が36基減少したことによる見かけ上の減少も含まれるだろう。IIC期からの変化として注目すべきは、船形文の管状把手付卵形壺（5船）が1点も確認できなかったということである。3地域共通で減少しており、他にこのような点数の変化は見られないこと、IIC期ではナカダ遺跡から離れた遺跡ほど減少していく分布状況だったことをふまえると、ナカダ遺跡から他地域に流通していた可能性が高いと考えられる。船の文様の土器の生産中心地はナカダ遺跡であるという、コックスの指摘を追認する結果となった。

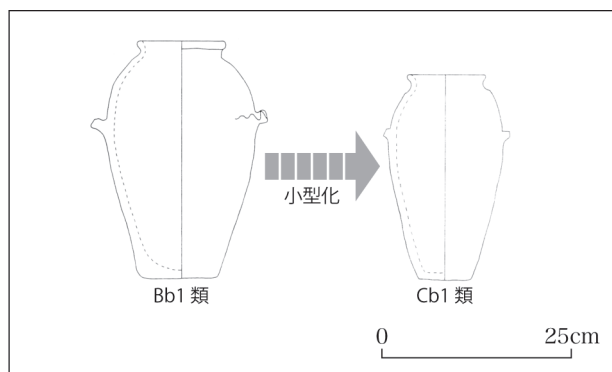
〈波状把手付土器〉

・ナカダIIC期

ナカダ遺跡から離れるごとに出土点数が減少している。また、副葬土器組成中の割合においてナカダ遺跡の値が突出し、他の遺跡では概ね一般的な値であることから、ケナ・パラス地域の近郊に位置するナカダ遺跡では、比較的容易に波状把手付土器を入手できた、あるいは生産していたのではないかと考えられる。さらに、全ての遺跡でBb1類が主体で、かつ他の器形が散発的にしか出土していない。つまり、ナカダ遺跡と各遺跡がバリエーションを共有し、距離が離れるほど出土点数が減少していく、という分布状況が認められるのである。加えて、IID期にはBb1類はナカダ遺跡からしか出土しなくなる。よって、生産開始期であるIIC期ではナカダ遺跡で製作された土器が各地に流通していた可能性が考えられる。

・ナカダIID期

全体の出土点数が増加する中で、ナカダ遺跡からの出土点数は減少し、アビュドス遺跡からの出土点数が増加する。この結果は、墓数の増加以上に、Cb1類がアビュドス遺跡に集中している結果が数字上に現れたことによる。Cb1類は、形態の類似性から、Bb1類に影響を受けて成立した器形であると類推できる(第14図)。この器形がアビュドス遺跡に大きく偏って分布している要因については、アビュドス遺跡で生産されていたからなのか、それとも、別の生産地から集積された結果なのかどうかを判断することができない。ここでは判断を留保し、彩文土器の分布状況と合わせて検討を行う。IID期の状況としては、Bb1類が減少し、より小型の器形が広く分布するようになったと言える。また、アビュドス地域とバダリ地域の間で量的分布と器形のバリエーションに相関が生じていることが指摘できる。



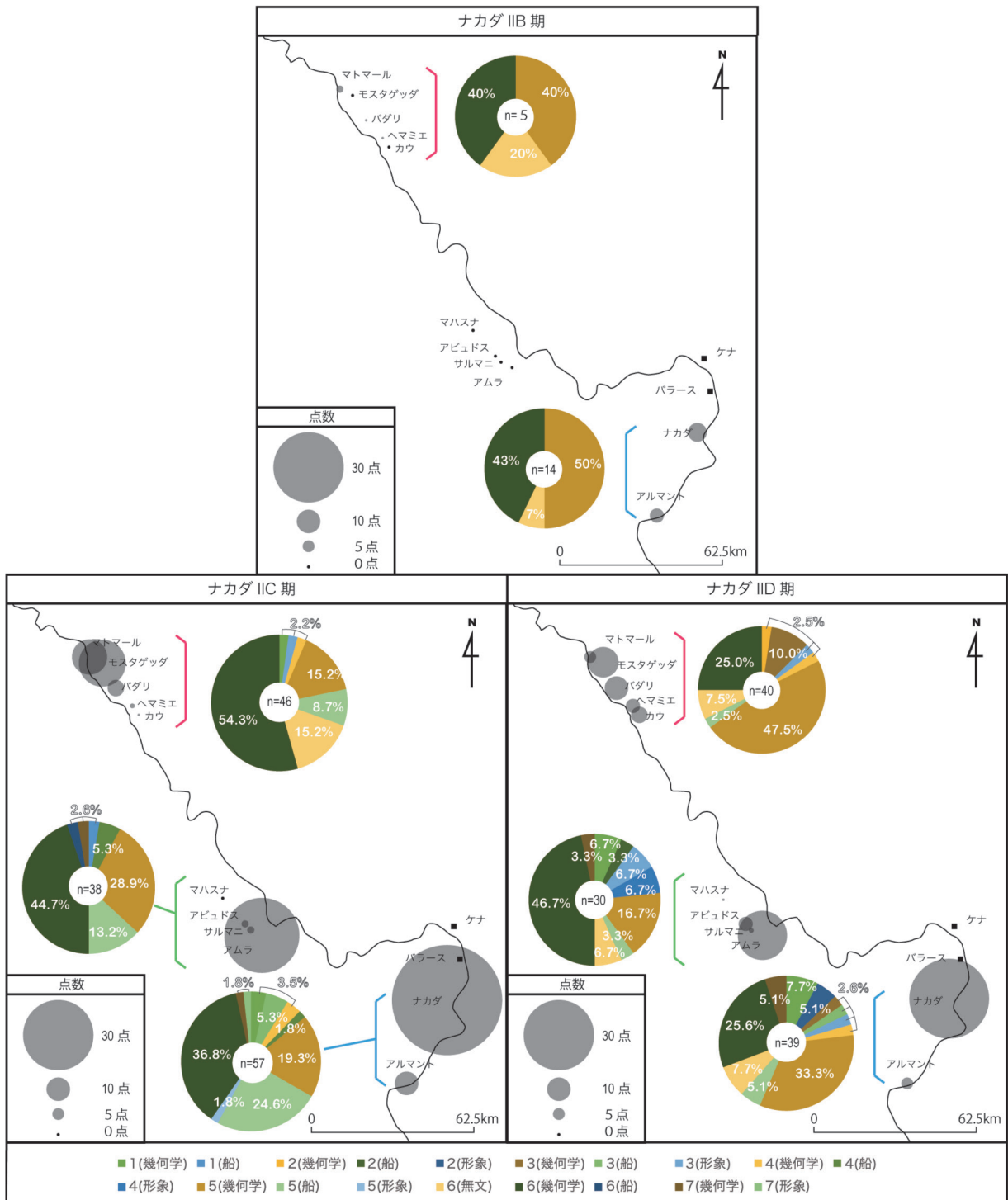
第 13 図 サルマニ遺跡出土の波状把手付土器

5. 考察

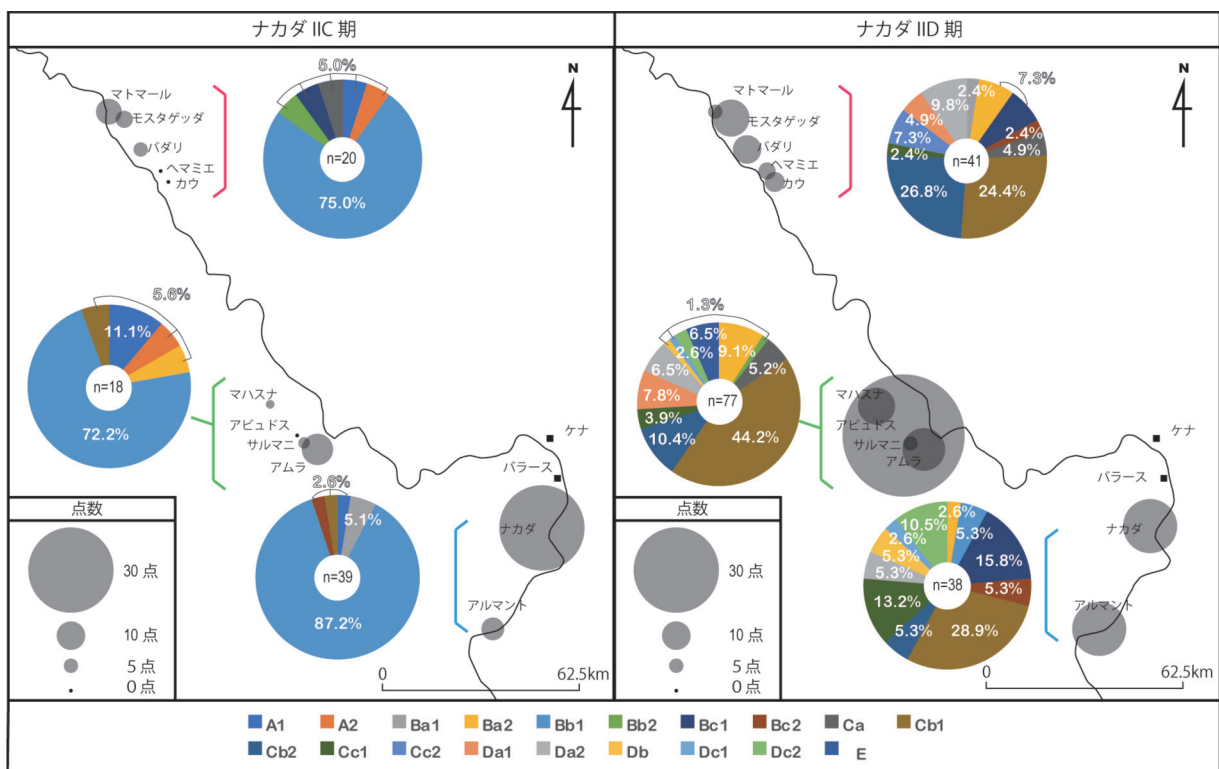
本章では、彩文土器と波状把手付土器の分布状況(第14・15図)を比較し、ナカダIIC期からIID期の硬質土器流通について考察を加えたい。

ナカダIIC期とナカダIID期を比較すると、彩文土器と波状把手付土器の分布状況に大きな変化が生じていることがわかる。波状把手付土器の分布の中心がナカダ遺跡からアビュドス遺跡に移ったのに対し、彩文土器ではそのような傾向が読み取れないのである。当該期、アビュドス遺跡は上エジプト内で政治的な影響を強めていく途上にあったとされており、また、D. パッチ (Patch) によると、アビュドス地域のセトルメントパターンを分析した結果、ナカダIIC期からIID期にかけて集落の集約化が起こったことと、集落の位置が低部砂漠から沖積平野に移動したことが認められるという (Patch 2004)。この変化の要因の1つとして、交易への参画による河川交通に対する重要性の増大が考えられることから、前時代と比較してアビュドス遺跡を中心に物資が集積されるようになることが想定される。しかし本稿では、硬質土器のなかで、波状把手付土器は顕著な増加を示すが、彩文土器はアビュドス遺跡で2点微増するものの、地域全体としては減少傾向を示すという対照性が明らかとなった。

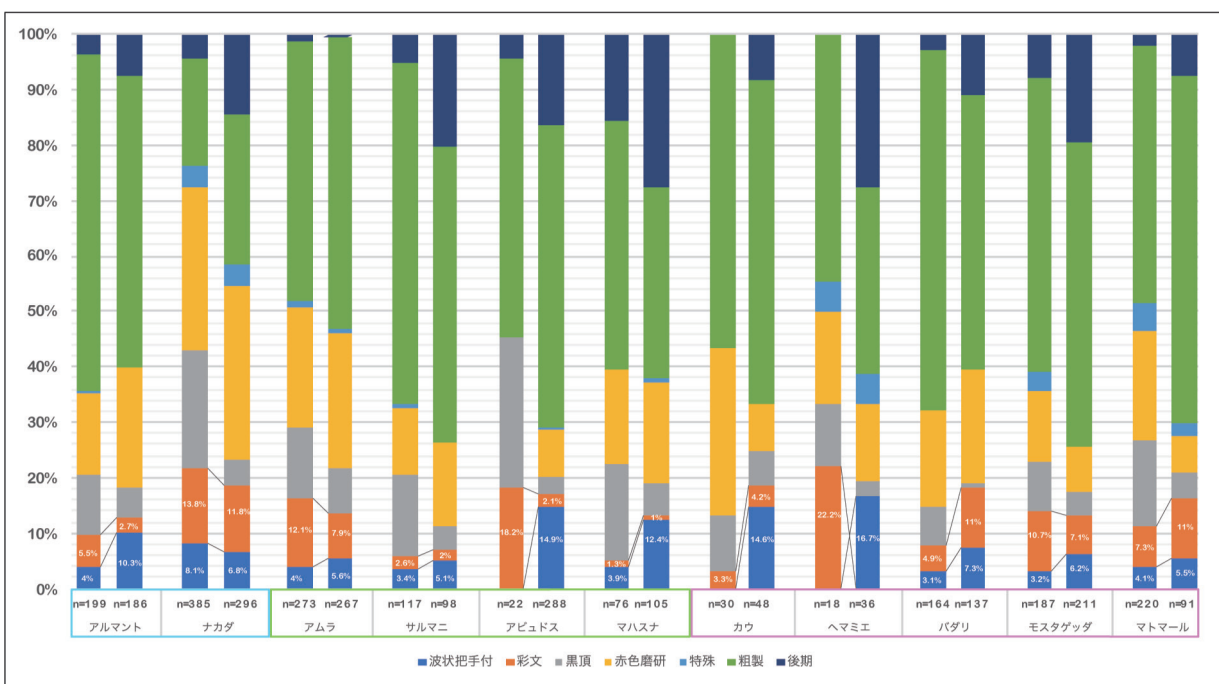
これらのことから、上エジプト内において彩文土器は、他の集落ないし地域への流通を意図して生産されるのではなく、コミュニティ内で消費することを目的として生産されたのではないかと考える。この仮説が成り立つならば、彩文土器の内訳において、ナカダ遺跡を中心に生産されていた船の文様の土器が顕著に減少したことを政体間のパワーバランスに影響された結果と解釈することができ、アビュドスにおかれてナカダを中心とする政体の影響力が弱まっていった当時の社会状況と合致するのである。ナカダ遺跡とアムラ遺跡が分布の中心であり続けたことは、2遺跡の流通における優位性というよりも、伝統の保持と考えるのが妥当であろう。埋葬のコンテクストからは、幾何学文か形象文かにかかわらず、彩文土器が年齢・性別および各社会階層に偏りなく配分されていたことが指摘されており (高宮 2003: 1067; Stevenson 2009: 202)、彩文土器が葬送や儀礼と結びついていることが窺われる。したがって、伝統的なコミュニティ内の紐帯と関わるような土器の社会的役割が、「流通の様相が変化しない」という形で現れたのだと考えられる。



第 14 図 彩文土器の分布状況



第 15 図 波状把手付土器の分布状況



第 16 図 副葬土器組成比 (左: ナカダ IIC 期、右: ナカダ IID 期)

続いて、彩文土器とは異なり物流の変化を反映したと思われる波状把手付土器について、どのような器形が志向されたのか、そしてその背景となる土器の社会的役割について検討していく。まず、IIC期とIID期の器形のバリエーションを比較すると、全体の傾向として小型化が認められ、その中心はアビュドス遺跡で最も多く出土しているCb1類である。先述したように、IIC期で主要な器形だったBb1類から派生したのがCb1類だと考えられるが、その約54% (30/56点) がアビュドス遺跡に集中しているのである。さらに、ナカダIIC-D期の副葬土器組成の変化 (第16図) を見ると、アビュドス遺跡からヘマミエ遺跡にかけて波状把手付土器の割合が10%ほど上昇していることがわかる。これらの遺跡では、ナカダIID期になるとB類が姿を消し、Cb1類とCb2類 (第17図) が主体となっているのである。したがって、小型化という傾向は、漸次的な変化以上に、小型な器形への需要に影響されたためだと言えるだろう。器形を小型化させることには、生産性を上げられることや運搬時の破損リスクを減らせるという利点が考えられ、製作段階から流通が意識されていたと言える。



第17図 マハスナ遺跡出土のCb2類

他のアビュドス地域の遺跡の分析結果からは、ナカダIID期にサルマニ遺跡のみ、波状把手付土器の出土点数が増加していないことがわかった。サルマニ遺跡はアビュドス遺跡に近接した墓地遺跡であることから、パッチ

の言う集落の集約化によって、死後に波状把手付土器が副葬されるような人物が、アビュドス遺跡の墓地に埋葬されるようになったことを反映した可能性がある。

以上より、当時のアビュドスを中心とする政体にとって、波状把手付土器の流通を掌握することは、上エジプトから下エジプトへと影響力を拡大していくうえで重要な要素のうちの1つだったと推測される。上エジプト内で誕生した、新しい技術と素材を用いた革新的な土器の作り分けは、紐帯の維持あるいは影響力の拡大という、異なる意識に基づいて行われていたのだろう。

おわりに

本稿では、地域統合プロセスと土器の社会的な役割を念頭において、硬質土器の分布状況を分析し、流通の様相を検討した。その結果、ナカダIID期を画期として、アビュドス遺跡に波状把手付土器の流通拠点が移動することがわかった。彩文土器がコミュニティ内で共有し、消費されることが意図されているのに対して、波状把手付土器は他地域へと積極的に搬出され、アビュドスを中心とする政体の影響力を示すものとして流通が制御されていた可能性を提示した。

波状把手付土器が流通したということは、単に特殊な土器が広まったことを示すだけでなく、この土器を副葬し、葬送において何らかの意味を持たせる慣習が広まったということの意味する (Stevenson 2016: 404)。よって、出土コンテキストからの検討を追加し、波状把手付土器の流通をコントロールする理由、そしてその背景についての理解も深めていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員である早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授にご指導賜りました。早稲田大学エジプト学研究所の先輩方には、日頃からご助言をいただいております。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

- (1) 本稿における上エジプト、下エジプトとは地理的区分である。カイロ以南を上エジプト、カイロ以北のナイルデルタ地帯を下エジプトとする。なお、先王朝時代における上エジプトの南限はアスワンまでと考える。
- (2) 馬場によれば、ナイルシルト胎土土器の焼成は野焼き、マールクレイ胎土土器の焼成は昂焰式窯の利用が想定されており、昂焰式窯はマールクレイの使用開始に伴う技術革新であったとされている (馬場 2013:

179-187)。

(3) ピートリーは9つのクラスを合計約3000に及ぶ形式 (type) を分類したが、ヘンドリックスによると、分類を採用した発掘報告書からは1553の形式のみが集成できたとされている (Hendrickx 1996: 44)。

(4) 51点から60点を集成できた土器として、ピートリー分類のB57b、R24a、R85h、W19 (筆者分類Bb1の一部)、W43b (筆者分類Cb1の一部) を挙げている。頻度としては、上位4番目のグループに含まれるという (Hendrickx 1996: 45-46)。

引用文献

- 高宮いづみ 2003 「エジプトナカダ文化の『赤色彩文土器』についてー埋葬のコンテキストからの理解ー」大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会編『新世紀の考古学ー大塚初重先生喜寿記念論文集ー』六一書房 p1055-1070
- 高宮いづみ 2006 『古代エジプト文明社会の形成』京都大学学術出版
- 馬場匡浩 2013a 「若手研究 (B) 22720294 エジプト先王朝時代における硬質土器の生産地に関する基礎的研究」『科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書』
- 馬場匡浩 2013b 『エジプト先王朝時代の土器研究』六一書房
- 馬場匡浩 2016 「若手研究 (B) 25770280 エジプト先王朝時代における硬質土器の焼成技術に関する考古学的研究」『科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書』
- Aksamit, J. 1992 Petrie's Type D46D and remarks on the production and decoration of predynastic Decorated Pottery. *Caiers de la Céramique Égyptienne* 3.: 17-21. Cairo: Institut Francais d'Archeologie Orientale du Caire.
- Amiran, R. 1969 Ancient Pottery of the Holy Land: *From Its Beginnings in the Neolithic Period to the End of the Iron Age*. Israel: Massada Press.
- Ayrton, E. R. & Loat, W. L. S. 1911 *Pre-dynastic Cemetery at El-Mahasna*. London: The Egypt Exploration Society.
- Baines, J. & Málek, J. 1980 *Atlas of Ancient Egypt*. New York: An Andromeda Book.
- Bard, K. A. 1994 *From Farmers to Pharaohs: Mortuary Evidence for the Rise of Complex Society in Egypt*. Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Baumgartel, E.J. 1970 *Petrie's Naqada Excavation: A Supplement*. London: Brenard Quaritch.
- Borriau, J., Bellido, A., Bryan, N., and Robinson, V. 2004 Neutron

Activation Analysis of Predynastic to Early Dynastic Pottery from Minshat Abu Omar, Hemamieh, and Armant. In S. Hendrickx, R. Friedman, K. M. Cialowicz and M. Chlodnicki (eds.) *Egypt at its Origins. Study in Memory of Barbara Adams*.: 637-663. Leuven: Peeters.

- Brunton, G. 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*. London: The Egypt Exploration Society.
- Brunton, G. & Caton-Thompson, G. 1928 *The Badarian Civilisation and Prehistoric Remains near Badari*. London: The Egypt Exploration Society.
- Buchez, N. 2011 A reconsideration of Predynastic chronology: The contribution of Adaïma. In R. Friedman and P. N. Fiske (eds.) *Egypt at Its Origins* 3.: 939-951. Leuven: Peeters.
- Cox, J. L. 2015 From Nubia to the Levant: The Distribution of Predynastic Egyptian Decorated Ware in Space and Time. In J. L. Cox, C. R. Hamilton, K. R. L. McLardy, A. J. Pettman and D. Stewart (eds.) *Ancient Cultures at Monash University: Proceedings of a Conference held between 18-20 October 2013 on Approaches to Studying the Ancient Past*.: 1-12. Monash: Monash University.
- Cox, J. L. 2020 Changing aesthetics: Petrie's Decorated Ware in the Naqada II and III periods. In Warfe, A. R. et al. (eds.) *Dust, demons and pots. Studies in honour of Colin A. Hope*.: 97-112 Leuven: Peeters.
- Frankfort, H. 1930 The Cemeteries of Abydos: Work of the Season 1925-1926. II. Description of Tombs. *The Journal of Egyptian Archaeology* 16: 213-219.
- Friedman, R. F. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh, Nagada, and Hierakonpolis*. Ph.D. dissertation. Berkeley: Department of Near Eastern Studies, University of California.
- Ben-Tor, A. 1992 The early bronze age. In A. Ben-Tor (ed.) translated by Greenberg, R. *The archaeology of ancient Israel*.:81-125. United States: Yale University Press.
- Graff, G. 2009 *Les Peintures sur Vases de Naqada I – Naqada II: Nouvelle Approche Sémiologique de l'Iconographie Prédynastique*. Leuven: Leuven University Press.
- Hendrickx, S. 1989 *De grafvelden der Naqada-cultuur in Zuid-Egypte, met bijzondere aandacht voor het Naqada III grafveld te Elkab. Interne chronologie en sociale differentiatie*. Unpublished Ph.D. Thesis. Leuven: Katholieke Universiteit Leuven.
- Hendrickx, S. 1996 The relative chronology of the Naqada culture: Problems and possibilities. In A. J. Spencer (ed.) *Aspects of Early Egypt*.: 36-69. London: British Museum

- Press.
- Hendrickx, S. 2006 Predynastic–Early Dynastic chronology. In E. Hornung, R. Krauss, and D. A. Warburton (eds.) *Ancient Egyptian Chronology*.: 53–93. Leiden; Boston: Brill.
- Hendrickx, S. 2011 Crafts and craft specialization. In E. Teeter (ed.) *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization, Oriental Institute Museum Publications 33*.: 93–98. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Hendrickx, S., and Bavay, L. 2002 The relative chronological position of Egyptian Predynastic and Early Dynastic tombs with objects imported from the Near East and the nature of interregional contacts. In E. C. van den Brink and T. Levy (eds.) *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium BCE*.: 58–80. London: Leicester University Press.
- Kemp, B. 1991 *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization*. London: Routledge.
- Köhler, C. 2010 Theories of state formation. In W. Wendrich (ed.) *Egyptian Archaeology*.: 36–54. Oxford: Blackwell.
- Köhler, C. 2014 Of pots and myths: Attempting a comparative study of funerary pottery assemblages in the Egyptian Nile Valley during the late 4th millennium BC. In A. Maczynska (ed.) *The Nile Delta as a Centre of Cultural Interactions Between Upper Egypt and the Levant in the Fourth Millennium BC*.: 155–180. Poznan: Poznan Archaeological Museum.
- Mond, R. & Myers, O. H. 1937 *Cemeteries of Armant I*. London: Oxford University Press.
- Naville, E.; Peet, T. E.; Hall, H. R. & Haddon, K. 1914 *The Cemeteries of Abydos. Part I: The mixed cemetery and Umm el-Ga'ab*. London; Boston: Egypt Exploration Fund.
- Nordstrom, H. A. and J. Bourriau. 1993 Ceramic Technology: Clay and Fabrics. In D. Arnold and J. Bourriau (eds.) *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*.: 148–190. Mainz am Rhein: Von Zabern.
- Patch, D. C. 2004 Settlement Pattern and Cultural Change in the Predynastic Period. In S. Hendricks, R. Friedman, K. M. Cialowicz, and M. Chlodnicki (eds.) *Egypt at Its Origins*.: 905–918. Leuven: Peeters.
- Payne, J.C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford: Clarendon.
- Peet, T. E. 1914 *The Cemeteries of Abydos. Part II. 1911–1912*. London; Boston: Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. 1921 *Corpus of Prehistoric Pottery and Palettes*. London: British School of Archaeology in Egypt.
- Petrie, W. M. F. & Quibell, J. E. 1896 *Naqada and Ballas*. London: Brenard Quaritch.
- Randall-McIver, D. & Mace, A. C. 1902 *El Amrah and Abydos. 1899–1901*. London: Egypt Exploration Fund.
- El Sayed, A. 1979 A Prehistoric Cemetery in the Abydos Area. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 35: 249–301.
- Stevenson, A. 2009 *The Predynastic Egyptian Cemetery of El-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*. Leuven: Peeters.
- Stevenson, A. 2016 The Egyptian Predynastic and State Formation. *Journal of Archaeological Research* 24 (4): 421–468.
- Takamiya, I. H. 2003 Prestige Goods and Status Symbols in the Naqada Period Cemeteries of Predynastic Egypt. In Z. Hawass (ed.) *Egyptology at the Dawn of the 21st Century: The Proceedings of the 8th International Congress of Egyptologists*.: 486–494. Cairo: American University in Cairo Press.
- Takamiya, I. H. 2004 Egyptian Pottery Distribution in A-Group Cemeteries, Lower Nubia: Towards an understanding of exchange systems between the Naqada culture and the A-group culture. *The Journal of Egyptian Archaeology* 90: 35–62.
- Wengrow, D. 2006 *The Archaeology of Early Egypt: Social Transformations in North-east Africa, 10,000 to 2650 BC*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilkinson, T. 2000 Political unification: Towards a reconstruction. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 56: 377–395.

図表出典一覧

- 第1図 Baines & Málek 1980: 21; Hendrickx 2006: Table. II.1.7. をもとに筆者作成。
- 第2図 Petrie 1921: pl. xxxviii–xxxx. をもとに筆者作成。
- 第3図 Petrie 1921: pl. xxxv.; Payne 1993: Fig. 35. 802, Fig. 37. 822, 829, Fig. 41. 864, Fig. 43. 869, Fig. 46. 894 をもとに筆者作成。
- 第4図 Petrie 1921: pl. xxxii., xxxv.; Payne 1993: Fig. 37. 822, Fig. 46. 887, 888, 894, Fig. 50. 925 をもとに筆者作成。
- 第5図 Payne 1993: Fig. 41. 864 をもとに筆者作成。

第 6 -11、14-16図 筆者作成。

第12図 Payne 1993: Fig.53. 1087 より引用。

第13図 Sayed 1979: Fig. 14. 5, Fig. 15. 1 をもとに筆者作成。

第17図 大英博物館：所蔵番号 EA49041 © The Trustees of the
British Museum

第 1 表 Hendrickx 2006: Table. II .1.2. をもとに筆者作成。

第 2 ・ 3 表 筆者作成。